

ひよし川柳会

働き方農の心も五月晴れ

熊本 忠真

雨上がり緑濃淡息をのむ

熊本 忠真

ピンクからみどりに染んで山動く

渡辺 照子

草原でみどりの風に逢う五月

加藤 桂子

新緑に誘われ距離が延ぶ散歩

宮川 柳酔

衣更え仕舞った衣類どこかいな

山本 雅之

トンカツの衣をはずしダイエット

川添 忠昭

衣食足り礼節忘れ悲しい世

伊勢本 恵

人間になり赤ちゃんの白産衣

水野すみこ

体調を維持して今日も若菜取り

男武志津江

山菜のあて一人占めする二合瓶

宇都宮 忍

菜の花へ恋に夢中の蝶の舞い

若宮 賢敬

春が来た私の胸も衣更え

渡辺 光男

米子 達雄

わがまち自慢百景「シュロチク(棕櫚竹)」



現在、300種類以上の観葉植物や植木を大切に育てている松岡恵伊子さん=大宿=。40年以上にわたり、たくさんの植物に囲まれながら生活してきた松岡さんですが、これまで一度も花を咲かせた姿を見たことがない植物がありました。それは、ヤシ科の一種である「シュロチク(棕櫚竹)」。しかし、先日、そのシュロチクが花を咲かせ、松岡さんご家族のみならず、近所の方々の注目の的となりました。

数十年に一度しか花を咲かさないと噂もあるシュロチク。松岡さんは「初めて見れてとても嬉しい」と、笑みを浮かべていました。

鬼北の足跡を辿る【第2回】

「等妙寺旧境内で検出された本堂跡の不思議」

発掘調査、整備中の国史跡等妙寺旧境内にスポットを当て、皆さんにぜひ知っていただきたい魅力、見どころを紹介していく「鬼北の足跡を辿る」。今回は寺院の中核と伝わる平坦部Aで検出された本堂跡を取り上げます。

今から6年前、平坦部Aの調査時には全体に広く焼土面が確認されており、それが1588年の火災による可能性が高いことが分かっています。発掘調査を進めていくと、平坦部中央に建物軸が異なる新旧2時期の本堂跡が検出されました。

新本堂は礎石配列から、来迎柱をもつ唐様建築で、周囲に縁のめぐる方三間の堂であることが確認できました。南予地域には、国の重要文化財善光寺薬師堂(鬼北町小松)をはじめ、室町後期から江戸期にかけての唐様建築の三間堂が集中する特徴がみられ、現等妙寺観音堂(如意輪堂・宝暦5年(1755年)に再建された町指定有形文化財)もこの一例です。

新本堂と現等妙寺観音堂は、柱間寸法がほぼ一致しており、新本堂焼失後、現等妙寺に移転されたのちも、本堂(如意輪堂)をほぼ同じ形で継承し続けている。



現等妙寺観音堂 (如意輪堂)

たことが分かりました。現等妙寺観音堂は瓦葺ですが、遺跡からは瓦は一切出土していません。当時の本堂は茅葺もしくは柿葺(こけらぶき)であったと想定されます。現等妙寺観音堂は、今無き等妙寺旧境内本堂の姿を現在に伝えているのです。

また、旧本堂は礎石を一部残すのみですが、地覆石の配列により、和様もしくは唐様建築で背面に廻り縁のない方三間堂と考えられます。

つまりは、等妙寺の創建当初より三間堂を本堂とする規範があり、旧本堂、新本堂、さらには現等妙寺境内に移転された江戸期まで連続と継承され続けていたのです。